

琴古流

凡八

千鳥会

第十一回演奏会

昭和四十五年十一月二十八日

於：京都教育文化センター

一 千鳥之曲

二 夕顔

三 三谷

四 ままの川

五 虚空鈴慕

六 竹

七 春の恵

八 残月

九 秋之言葉

賛助

山岸社中

同志社女子大邦楽部

トールダム女子大箏曲部

# 千鳥の曲

六段と並び称される曲で、名古屋の吉沢  
検校が箏曲として新機軸を出した曲である。  
調子は、雅楽調を採り入れて独特の古今調  
子を案出し、歌詞は、前唄は「古今集」か  
ら、後唄は「金葉集」から千鳥に關する和  
歌一首ずつを選び組歌に擬して古今組と名  
づけた。古典風に新味を加えた曲である。  
初め胡弓で作曲されたものを箏に移したと  
いわれているが、そのためか、今でも胡弓  
をいれて合奏することもある。前奏、前唄、  
手事、後唄からなる。この演奏会では、尺  
八をはじめて間もない一回生が演奏するが  
曲の表面を追うだけでなく、この曲のもつ  
味わいにも留意して演奏したい。

## 前唄

しほの山さしでの磯に住む千鳥  
君が御代をば八千代とぞ鳴く

## 後唄

淡路島かよふ千鳥の啼く声に  
幾夜も覚めぬ須磨の閑守

## 夕顔

菊岡検校が天保頃作曲し、八重崎検校  
が箏で編曲して合奏曲とした。源氏物語  
夕顔の巻をまとめたような歌詞で、前唄は  
源氏と夕顔の出会い、後唄は夕顔を失な  
たあとの源氏の悲しみを述べている。箏  
平調子、三味線はニ上リ。

夕顔を原文で読んだことありますか  
おだし読んだことないんですけど、夕顔の  
もつあの情趣を、サラッと表現します。

住むやたれ、とひてや見んとたそかれに  
寄る車のおとづれも、能てゆかしき中垣  
のすきま求めてかいま見や、かざす扇に  
たさしめしそなたき物のほのほのと、主

は白露光りをそへて（千事）いとどはえ  
ある夕顔の、花にむすひしかりねの夢の  
さめて身にしむ夜半のかせ

### 三谷

晋化天八本曲の一つ。曲調が邦楽の三下  
り調に似て、なだらかなところがあり、古  
来全国に産無僧に愛奏されている。各地に  
この曲を得志にする者が現われたが、東北  
の「神保三谷」(神保正之助)、越後明暗寺  
依の「越後三谷」などが有名である。京都  
では京都明暗寺依を「三谷の曲」という。  
曲名の三谷は、中国にある三つの谷の響き、  
が相呼応する故事を現わしたものとも言わ  
れている。

### ま ま の 川

作詞者は京都の宮腰夢蝶。作曲は松野、  
菊岡両教授の合作。文政天保期の作品。

この冒頭の文句「夢が浮世か」が、義太  
夫の「壺坂」にはいつている。唄は透女の  
身の上を浮世の夢とし、あきらめと自棄的  
な可憐な気持を叙情詩風に唄、たものご、  
その身の上を川に託している。前弾、前唄  
千事、千ラシ、後唄からなり、箏は平調子  
三味線は二上り。千事は京物の代表といわ  
れる位で、非常に凝、たものごで曲全体を極  
めて艶麗である。その曲のもつ艶、ばさを  
生かすべく演奏したい。

夢が浮世か浮世が夢か、夢て、千里にすみ  
ながら、人因は恋を思ひ川、うすもまこ  
ともただくちさきで、一夜ながれの妹背  
の川をその水くさき心から（千事）

よその香りの襟袖ぐらに、耐きてかよはば  
なんのまあ、かわいかわいの鳥の聲に  
さめてくやしきまの川

### 虚 空 鈴 慕

鎌倉時代の中頃、禅僧法燈国師が宋に留  
学中古伝の尺八曲「虚鈴」(真虚鈴)を学  
んで帰朝し、この曲の極意を高弟虚竹に伝  
えました。虚竹はこれを吹いて行脚するう  
ち、靈夢と感して竹音にそれと移ったが  
「虚空鈴慕」です。この曲は、禅的境地の  
悟りの後の明るさ(と)いって、でも全くわから  
ない(ですが)もろろっており、主に音楽的  
色彩に富む旋律の美しさを表現できれば、  
と思っております。

### 竹

山本邦山が昭和39年に作曲した曲です。  
曲は三部にわかれ、孟宗竹・若竹・布袋竹  
の三つの竹の個性を尺八二部で現したも  
です。オー楽章「孟宗竹」ゆくりと深  
に生えた孟宗竹の神秘を秘めた幽玄さ。オ  
二楽章「若竹」中虚に雨上りの趣先きに素  
朴に生えた二本の若竹の凡情。オ三楽章「  
布袋竹」諧謔的な布袋竹の印象  
「竹」という言葉を聞いたとき、京都にい  
て身近に感じているところの「竹」に對する  
イメエジと、「竹」という別名を持つところ  
の「尺八」に對するイメエジとによって、少  
々はある特殊な、ホニワカとした感情が  
かざるを得ない。そういう感情と、この曲  
の曲想とによって、醸し出される情緒はど  
んなものであろうか。

よその香りの襟袖ぐらに、耐きよかよはばなんのまあ、かわいかわいの鳥の聲にさめてくやしきまの川

### 虚 空 鈴 慕

鎌倉時代の中頃、禅僧法燈国師が宋に留學中古伝の尺八曲「虚鈴」(真虚鈴)を學んで帰朝し、この曲の極意を高弟虚竹に伝えました。虚竹はこれを吹いて行脚するうちに、靈夢と感じて竹音にそれと移したのが「虚空鈴慕」です。この曲は、禪的境地の悟りの後の明るさ(と)いって、でも全くわからないうです(が)もろっており、主に音楽的色彩彩に富む旋律の美しさを表現でされ、と思っております。

### 竹

山本邦山が昭和30年に作曲した曲です。曲は三部にわかれ、孟宗竹・若竹・布袋竹の三つの竹の個性を尺八二部で現したものです。オ一楽章―孟宗竹―ゆ。くりと深かに生えた孟宗竹の神秘を秘めた幽玄さ。オ二楽章―若竹―中庸に雨上りの趣先きに素朴に生えた二本の若竹の凡情。オ三楽章―布袋竹―諧謔的な布袋竹の印象。「竹」という言葉を聞いたとき、京都にて身近に感じているところの「竹」に対するイメエジと、「竹」という別名を持つところの「尺八」に対するイメエジとによって、色々はある特殊な、ホニワカとした感情をかざるを得ない。そういう感情と、この曲の曲想とによって醸し出される情緒はどんなものであろうか。

よその香りの襟袖ぐらに、耐きてかよはば  
なんのまあ、かわいかわいの鳥の聲に  
さめてくやーままの川

### 虚 空 鈴 慕

鎌倉時代の中頃、禅僧法燈(国師が宋に留  
学中古伝の尺八曲「虚鈴」(真虚鈴)を学  
んで帰朝し、この曲の極意を高弟虚竹に伝  
えました。虚竹はこれを吹いて行脚するう  
ち、靈夢と感得て竹音にそれを移したのが  
「虚空鈴慕」です。この曲は、禅的境地の  
悟りの後の明るさ(とい)。でも全くわから  
ない(ですが)もろろており、主に音楽的  
色彩に富む旋律の美しさを表現でされ、  
と思っております。

### 竹

山本邦山が昭和37年に作曲した曲です  
曲は三部にわかれ、孟宗竹、若竹、布袋竹  
の三つの竹の個性を尺八二部で現したま  
です。オー楽章ー孟宗竹ーゆ。くりと深  
に生えた孟宗竹の神秘を秘めた幽玄さ。オ  
ニ楽章ー若竹ー中庸に雨上りの趣先きに素  
朴に生えた二本の若竹の凡情。オ三楽章ー  
布袋竹ー諧謔的な布袋竹の印象  
「竹」という言葉を聞いたとき、京都にい  
て身近に感じているところの「竹」に對する  
イメエジと、「竹」という別名を持つところ  
の「尺八」に對するイメエジとによって、  
々々はある特殊な、ホニワカとした感情を  
かざるを得ない。そういう感情と、この曲  
の曲想とによって、醸し出される情緒はど  
んなものであろうか。

## 春の恵

この曲は昭和六年四月久本玄智の作曲によるものです。宮城道雄が生田流から出た新日本音楽の代表的作曲者とするれば、久本玄智は山田流の第一人者です。彼の作品は洋楽系統の曲想によって作曲されたものが多く、春の恵は代表作品の一つです。三楽章からなっていて、それぞれ尺八と箏とのパートを生かしたものです。第一楽章は陽春の朝のたたずまいを $\frac{2}{4}$ 拍子で表わし、第二楽章は $\frac{3}{4}$ 拍子で春の雨の宵の静かさを尺八独特の哀調によって尺八の味を生かし、第三楽章は快速に $\frac{4}{4}$ の速いテンポで曲を盛りあげています。

この春かう手かけましたか、はじめは曲の速さについていけず、他の部員が投げ出したのをこの三人はしつこくも練習を重ね

やつと速さについていけるようになった。たうなんと、この曲は単調で面白くないなどと言い出したのです。はたしてこのスランプをどこまで克服できているやら演奏を聞いて下さい。

## 残月

大阪の峰崎句当が秘蔵の愛弟子（松屋集の娘）が若くして死んだので一週忌に追善としてこの曲を作り手向けた。天明寛政期の曲です。曲名の残月は故人の法名から由来しています。

磯辺の松に葉隠れて 沖の方へと入る月  
の光や夢の世を早く 覚めて真如（信女）の  
明らけき 月の都に住むやうむ 今も伝  
だにおぼろ夜の月日はかりはめぐり来て



# 秋之言葉

箏曲の大部分は京都か大阪、僅かに名古屋、稀れに九州で生まれているが、この曲は岡山で作られた。作詞・作曲者は、西山徳茂都。歌詞は秋の虫の音々に遠砧の音も配し、仲秋の名月もたたえたものです。今年の名月は雨でみえずへもつとも三時頃牙々と輝いていたのを見た人もあることだろうか。虫の音も既に聞えなくなり、砧の音などは聞いたこともないけれど、なんとか三つを想像したから、の雰囲気をもと心かけました。

散り初むる桐の一葉にありすから、秋涼しく朝夕は、野辺の千草に置く露のつゆの情を身に知るや、誰れ松虫の音にたまで、いとと優しき鈴虫の、まにひかれてもののふが、走らす駒のくつわ

虫、哀は同じ片星の、いふせき賤が伏屋にも、つれさせてふきりざりす、はた幾ら出うたんに、合わす拍子の遠砧（手事）おもしろや、ふけゆくままの太空に、隅なき月の影清く、こよひぞ秋の最中とは、いにしへ人の言の葉を、今に伝へて、敷島の道のしほりと残しける。

—以上

竹